
野生動物救護の会特別講演会

概要版



講師：諏訪流第十七代宗家 田籠善次郎

平成20年6月1日

猛禽類のリハビリについて

猛禽類の救護状況をふまえ、講師がかわって田籠さんから、伝統的な鷹匠の猛禽訓練方法を応用した野生復帰のためのリハビリ方法についてお話いただきました。



1. 鷹匠になったきっかけ

多摩ニュータウンができたばかりの頃、最初の住民として暮らすことになった。入居した集合住宅は4階建て、自分の部屋は1階にあった。ある日家を出ると頭の上をチョウゲンボウが飛び交っていた。この辺りには猛禽が住んでいる・・・そう思い周辺の林を散策し始めた。

そんな散策中にサシバの巣を発見した。3羽のヒナが生長するのを楽しみにしていたが、開発のため営巣木が伐採されてしまった。伐採していた作業員と話をする、「ヒナがいたよ。孫のお土産にしようと思って」という。そこでお願いして1羽わけてもらった。大きく成長はしたものの、うまく飛ぶことができない。他の鳥のように成鳥になれば自然と飛べるようになると思っていたのに、どうしてうまくいかないのか。そうした経験から、リハビリを意識して古来より鷹を手なづけ調教し、鷹狩りを行ってきた鷹匠の世界へ入ることになった。

2. 鷹匠の技術が広く知られることに

ある時、多摩川で翼の折れたチョウゲンボウが保護された。獣医に預けられ怪我は回復したが、自由に空を飛ぶことができないでいた。野生復帰できなければ治療が完了したとは言えない。そんな事情で相談を受け、では鷹匠に預けて様子を見てみようということになった。鷹匠は鷹狩りに使う猛禽を生涯飼い続けるわけではない。戦前までは15、6年すると野に返すという慣習があり、その伝統的な鷹匠の技術をリハビリに応用できるのではないかとということで実施してみた。

折れた翼は固定していたために硬くこわばっていたので、まず自由に翼を広げられるようにマッサージを施し血行を促進させた。尾羽も折れたり抜けたりしていたので、継ぎ羽根などを行い翼の回復を行った。自由に羽ばたきができるようになると飛行訓練を実施。ついに自由に飛行できるようになり、野生へ返すことができた。

この様子をNHKが取材し、全国に放送された。この時から「鷹匠は変人が多い」などと言われあまりよくなかったイメージが改善され、また猛禽類のリハビリに鷹匠の技術が使えると認められるきっかけとなった。

鷹匠の技術紹介

ここからは鷹匠の世界で実際に行っている猛禽類のケアについて、根津さんのオオタカ（フィンランド産）をモデルに説明していただきました。



1. 猛禽類を保護してからの流れ

保護された猛禽類の年齢をまずチェックする。成鳥であれば治療をほどこしなるべく短期間で放野してやるようにする。幼鳥やヒナの場合は成長度合いに応じて飼育し、飛行・採餌訓練をして放野する。このため長期間飼育することになる。

猛禽類の管理で注意したいのはまずストレスをかけないこと、そして羽根を傷つけないように気をつかうことである。普通の鳥かごに入れると金網で羽根を傷つけたり、のぞかれることでストレスを受けやすい。野外の止まり木に足皮¹をつけて止まらせ管理するのが理想的である（止まり木は金製でも大丈夫）。猛禽は止まり木に止まらせておけば何時間でもじっとしていられるので、フンの対策さえしておけば室内に置くこともできる。この場合も視線を避けるため衝立をしたり、猛禽用のフード²をかぶせておくなどしておく。

飛行訓練をするには手に止まらせなければならない。伝統的な訓練方法としては、暗闇で鞆（えがけ：鹿皮で作った手袋）をした手に猛禽を乗せ、

「ねず鳴き」（チューチューとねずみの鳴き真似をする）をする。すると柔らかな鹿皮の感触もあいまって獲物を掴んでいると勘違いした猛禽は、ギュッと握りこんでくる。この時餌を用意しておき、掴んだら餌をついばめるようにしておく。これを繰り返し、手に止まることを覚えさせる。暗闇でなくともフードをかぶせて視界を遮れば訓練できる。しかしこの場合あまりいやな目にあわせるとフード自体を嫌がるようになるので、注意が必要である。



¹ 鷹匠が使用する道具の一つ。鹿皮で作られ、猛禽の足に結びつけ引き綱のように使用したり、止まり木に固定したりする。犬の首輪みたいなもの？

² 猛禽の頭にスポッとかぶせて目隠しする頭巾。主にハヤブサに使用するとあったが（日本鷹匠協会 HP）、田籠さんによれば個体差もあるがオオタカにもかぶせることがあるようだ。



手に止まるようになると、猛禽は人の目を見て心の動きを判断するようになる。鷹匠の心が安定していないとそれを鋭く察知し、ストレスを感じてしまう。いつも穏やかに安定した心を保つ精神修養も必要である。また手に猛禽を据えて移動などするとき、猛禽を乗せた手が上下に動かないよう訓練もする。

そのようにして猛禽が慣れてきたら、翼の具合などをチェックし、何かあれば治してやる。

これらは『野生動物のレスキューマニュアル』（文永堂出版 森田正治著：2006年3月発行）にも掲載されているので参考にされたい。

2. 作業の実演

部屋の広い場所に移動し、オオタカをモデルに実際の作業を実演していただいた。

2-1 保定の方法

作業を開始する前、鳥の負担を軽減するためにしっかりと保定することが肝心である。鷹匠たちは作業に使用する道具は全て手作りする。鳥の翼を固定するためには手ぬぐいが便利である。一枚の手ぬぐいを二つ折りにして指が三本入るくらいの間隔をあけ、一方を糸で止める。猛禽の頭をこの隙間に通し、体を手ぬぐいの両端でぐるりと包んで背中側で軽くしばる。これで簡単に保定することができた。さらにフードをかぶせ、落ち着かせてやる。



保定の様子



とても安定している

また、猛禽類はくちばしよりも足の爪のほうが危険なので、足を束ねてセロテープでぐるぐる巻き、固定する措置をとる。セロテープは一カ所に切り込みを入れれば簡単にはがせるので、使い勝手がよい。

2-2 継ぎ羽根

「タカの羽は抜くと生えてこない」と言われる。無理に抜くと毛穴が収縮し、次の羽が生えてこなくなってしまうのだ。そのためどんな羽でも大切に扱う。

衝撃で折れてしまった羽根は自然に抜け替わるのを待つか、「継ぎ羽根」を行う。竹ひご等を羽根の軸に通し、折れた羽根同士をつなぎ合わせる方法である。



別の羽根の軸を貼り補強している



表側

軸に刺すのは竹ひごの他にピアノ線なども使う。羽根の大きさ、軸の空洞の太さなどによって素材を変えている。接着には昔は天然素材の糊を使っていたが、現在は瞬間接着剤を使用している。瞬間接着剤だと作業が早く終了するので、鳥の負担が軽くなる。

写真が見にくいですが、尾羽の継ぎ羽根の様子を紹介する。



形、長さなどを調整して合わせる



ピアノ線を利用している



接着剤を付けぐっと押し込む

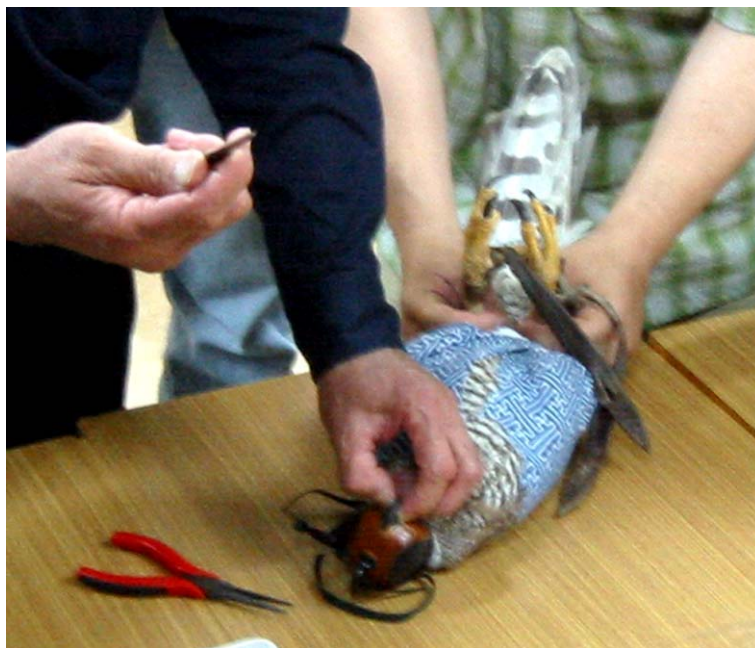


違和感がないように羽根を整える

猛禽の羽根は貴重なので、換羽した羽根は大切に保管している。(特に尾羽根12枚と初列風切羽根左右20枚)

2-3 くちばしのケア

飼育されている猛禽類にはなるべく生きた鳥に近い物を与えるように心がけなければならないが、どうしても柔らかい肉を与えてしまうことも多い。その場合くちばしが伸びすぎ、うまくかみ合わなくなって食欲が落ちたり、悪くすると生きる気力もなくなってしまう結果につながる。そこで適度な状態にくちばしを保つため、ヤスリで削ってやる。(特にハヤブサはくちばしの形が二段になっているので削り方に注意)



ヤスリで削り、ナイフできれいに整える。高度な技術が必要。

また、同様に伸びすぎた爪も削る。

2-4 翼のマッサージ及びコミュニケーション

翼をマッサージすることで、弱っている個体は元気を回復することがある。また、翼の開きが悪く飛行に支障をきたした個体も、マッサージすることでほとんど改善される。

翼に障害があるかどうかのチェック方法は、翼の肩口に指を添え、すつとなでるようにすると自然に翼が広がる。その時羽先まで伸びれば正常だが、途中で硬くなっている部分があると伸びない。



肩口に指を添える



なでるように翼をのばす



マッサージ方法は、まず猛禽には餌を囓らせ、その間に胸から羽先までを掴むようにもみほぐしていく。

また、鷹匠の道具で「策（ブチ）」という藤ヅルで作った棒がある。これで猛禽類の体をこすったり、なでたりすることでリラックス効果を与え、コミュニケーションもはかれる。どうやら薬効もあるらしく、昔の話で腫瘍

のできたタカに毎日これで水を含ませ飲ませていたところ、その腫瘍がなくなった、などという話もある。

世界中に鷹狩りは存在するが、このように鷹とのコミュニケーションをはかるとい文化があるのは日本だけである。鷹狩りは1600年前に日本に伝わったと言われるが、体系が確立したのは江戸時代で、今でもそれは受け継がれている。



最後に

最近保護される猛禽で、どことって外傷はなく、また身体もやせていないが飛べなかったり、動けなかったりする個体が目に付くようになった。どうやら農薬中毒の症状が出ているのではないかと推測されている。

田畑に散布された農薬を小動物が取り込み、その小動物を猛禽類が食べることでさらに高濃度の農薬を摂取することになる。蓄積された農薬により中毒症状を起こしているようだ。以前調査をしていたオオタカが不信死をした。解剖の結果、20年前に禁止されたはずの農薬の成分が検出された。これは違法に使い続けている農家があるのか、または20年間蓄積され成分が消えなかったためなのか、詳しいことは分かっていない。後者であれば恐ろしいことで、猛禽類の生活環境におよぼす人の害について考えさせられる。

農薬だけではなく、餌として食べている小動物がかかっている病気がうつることもある。サルモネラ菌などが挙げられるが、これらにかかるとやはり動けなくなる症状がでる。

傷ついた個体を保護するだけでなく、彼らの生活環境を整えることが大切だと思う。

猛禽類の救護に携わる方々にも一言申したい。保護されてから元気を回復した個体は、足皮をつけて野外の止まり木で管理してほしい。猛禽類は誇り高く、精神的に傷つきやすい。人間に保護された個体はそれだけで心を傷つけているので、野生に戻すためには彼らの誇りを回復させなければならない。そのためにも囲われたゲージに収容するのではなく、一羽ずつ止まれる止まり木につないでおいてほしい。

また、怪我でどうしても野生には返せないという個体については、私は安楽死も選択の一つとして考えてもらいたいと思っている。タカ類は長期間人に馴らさずに飼育されることを嫌い、生きる気力を失っていく。誇り高い精神性を重んじ、長期飼育はなるべく避けてもらいたい。

質疑応答

Q：猛禽類でも種類によって人から触られるのに強いものと弱いものというのですか？

A：トビ、ノスリ、オオタカは比較的触れても大丈夫です。特にトビ、ノスリは人を怖がらず、お腹が空くと餌をもらいに來ることもありますね。

その他のタカ類、ハヤブサは触られることに弱いです。ハヤブサは独特の狩り行動を取るため羽根が堅く、人の手の油が付着すると羽根としての機能が低下する場合があります。ですから直接手では触れず、先ほど紹介したブチで触ってやったりと気を配っています。ハヤブサの足にも気をつけてくださいね、とても強く爪も鋭いため、大けがをすることがあります。

Q：飼っているタカとの信頼関係を感じることはありますか？

A：少なくとも3，4年飼わないと信頼関係は築けませんね。狩りに出たとき、思うように獲物が捕れた場合など、心が通じたような気持ちになります。

Q：マッサージの方法を具体的に教えてください。

A：(2-4で紹介しました。)